



Title	英語の音声教育と音声学
Author(s)	添田, 裕
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 9, pp.99-103; 1986
Issue Date	1986-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/30021
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-17T06:03:18Z

英語の音声教育と音声学

添 田 裕*

(昭和60年10月31日受理)

English Pronunciation Teaching and Phonetics

Yutaka SOEDA

(Received October 31, 1985)

1. はじめに

英語科1年生のための英語音声学を担当してから少くとも15年にはなる。初期の頃は前の担当者にならない、小栗敬三著「英語音声学概論」(篠崎書林)を使ったが不満な点が多く間もなく使うのを止めた。その後はO'Connor, J.Dの *Better English Pronunciation* (Cambridge University Press) を成美堂から出版される前は英国に注文して使い始めてから昨年まで10年以上になる。*BEP*には長所が多い。第1に、高校生にも読めるような易しい英語で書かれていること、第2に内容が包括的でしかもよく整理されていること、第3に適切な例が多いこと、第4に英語教師自身の発音の改善に役立つだけでなく、中学や高校の授業にすぐ役立つ記述が多いことなどが挙げられよう。1980年の改訂により付属テープが特に良くなり更に使い易くなった。大学1年生用のテキストとして現在のところ最良のもの1つと言えよう。

ただし、外国人学習者を意識し過ぎたのか、もう少し詳しく書きたいところを押さえて簡略化したり省略したと思われる箇所がいくつかある。深く突っ込んだ記述が必要な項目は例えばTeacher's Guideなど別冊にして出すのも一案かと思う。その点、本年度から使用しているRoach, P. (1983)の *English Phonetics and Phonology* (Cambridge University Press)——以下 *EPP* と略す——は標題からも推測できるようにかなり突っ込んだ記述が多く見られる。この著者も外国人学習者を念頭に置いて書いているが、この本を使う教師への配慮も随所に見られる。書かれている英語はくだけた口語体で、まるで著者の講義を聴いているような感じがする程である。また、未解決の問題は未解決だと卒直に認めているので *BEP* にはない高度な知的好奇心をかきたてられる。

2. fortis / lenis

次節で詳細に検討する fortis / lenis の問題について両者の論じ方がどう違うか見てみたい。O'Connor は friction consonant と stop consonant の記述の中で何度もくり返して

*長崎大学教育学部英語教室

この問題に触れている。(O'Connor は教育的配慮からであろうが fortis / lenis という語は使っていない。)例えば / f / is stronger and longer, / v / is weaker and shorter... と説明し, θ / ð, s / z, ʃ / ʒ, p / b, t / d, k / g も同様に取り扱い結論的に次の rule を与えている。

'strong consonants at the end of words shorten the preceding vowel, weak consonants lengthen it' (p.27)

これと次の Roach の説明を比較してみよう。

'The difference between p, t, k and b, d, g is primarily the fact the vowels preceding p, t, k are much shorter.' (p.31)

Roachには O'Connor の後半部に当たるところがないのにすぐ気付く。Roach は別に Tutor's Book (pp.64) という小冊子を書いていて、その中で Section 別の参考文献や指導上の留意点, 更に教科書では故意に省略した知見を紹介している。例えば fortis / lenis に関する section は Student's Book では15行で終わっているが Tutor's Book では40行も費している。* Roach の考えは次の引用に表明されている。

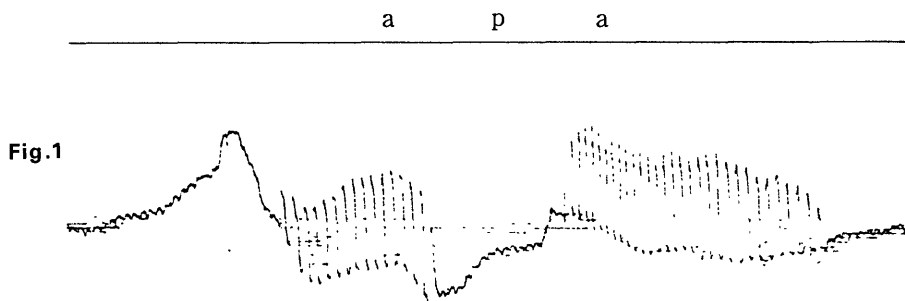
'Some phonetics books wrongly state that b d g lengthen preceding vowels, rather than the p t k shorten them,' (p.24)

つまり Roach は, O'Connor に限らず一般的に常識化しているこの現象の説明に対しその半分を否定しているわけである。音声教育では絶対に触れなければならない fortis / lenis の問題は実はなかなかの難問題であることがわかる。また筆者はここ数年来この音声現象の原因に興味をいだいてきたので, これと合わせて次節で検討してみたい。

3. p ≠ b (?)

fortis / lenis それぞれの代表として p と b を実験音声学的手法で比較してみたい。利用する資料はすべて, 筆者が昭和52年夏, 文部省と英国文化庁の補助を受けて Essex 大学に留学した時音声学を担当した Tatham 教授の講義で得たものである。

我々は常識的に (p は - voice, + tension) (b は + voice, - tension) と考えているが, 本当にそうだろうか。下の Fig. 1 と Fig. 2 はそれぞれ apa, aba と発音した時のオシログラムである。



*Gimson, A. C. (1984) にも Roach 程の詳細な記述はない。

4. 先行母音の長さ と fortis / lenis の関係

made [meid] / mete [meit] の [ei] の長さが違うのは客観的事実である。前者が後者の1.5倍長いと言ってよい*。しかしその理は何であろうか。この音声現象に論及する音声学関係の文献の中で、その原因を追求したものはほとんどない。Essex 大の Tatham 教授に質問したが十分納得できる答えは得られなかった。昭和59年の在外研究で短期間滞在した London 大学音声学科の Mr Howard と Mr Ashby にも訊ねたが「わからない」という返事だった。Willins**がこの問題に推定を試みているが、上に見た実験データに照らしてにわかには信じがたい。

筆者の知る限り、今までのところ Catford の説が一番説得力があるように思う。

‘There are good aerodynamic reasons for the voiced consonant being shorter than the voiceless consonant, so this is no mystery. Apparently in English there is a kind of ‘duration quantum’ available for the syllable, so that if the final consonant is short the vowel must necessarily be long, and vice versa, …’ (Catford (1977, p.197))

そして彼は次の図を書いている。

<i>duration quantum</i>				
k	æ	t	cat	
k	æ	d	cad	

‘No other convincing explanation of this phenomenon has been suggested.’ という言葉に彼の自信の程がわかると同時に、この問題はまだ未解決の部分があるようにも思える。

5. おわりに

以上、大学1年生の英語音声学の授業の中で取り扱っている1つの音声現象を、主として実験音声学のデータを利用して研究してみた。中学や高校の英語の授業で cat / cad の [æ] の長さが違うことを教えれば、何人かの生徒は英語の音声に大変興味をもつと思う。また教師にとってはこの音声現象の理由を背景知識として持っていた方がよいのは言うまでもない。こういう研究をしていて今更ながら実験音声学の設備が欲しいと感じた。

* Cf. Ladefoged (1982, p.172) / ** Wilkins (1972, p.50)

Bibliography

- Abercrombie, D. (1967) *Elements of General Phonetics* (Edinburgh University Press)
- Catford, J. C. (1977) *Fundamental Problems in Phonetics* (Edinburgh University Press)
- Gimson, A. C. (1984) *An Introduction to the Pronunciation of English* (Edward Arnold)
- Ladefoged, P. (1967) *Three Areas of Experimental Phonetics* (Oxford University Press)
- _____ (1982) *A Course in Phonetics* (Harcourt Brace Jovanovich)
- O'Connor, J. D. (1980) *Better English Pronunciation* (Cambridge University Press)
- Roach, P. (1983) *English Phonetics and Phonology* (Cambridge University Press)
- _____ (1983) _____ Teacher's Book (Cambridge University Press)
- Wilkins, D. A. (1972) *Linguistics in language teaching* (Edward Arnold)